
奴隸王女の「死ねばいいのに」は結構辛い。

廻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奴隷王女の「死ねばいいのに」は結構辛い。

【Nコード】

N8329Y

【作者名】

廻

【あらすじ】

ん？ え？ わたし？ 名前は、言えないなあ。ほら、バレちゃったら殺されちゃうし。まあ、二つ言うとするなら、わたしは元王女で
今は、奴隷やってます。そんな、わたしこと、せーちん（ ）がお送りする、奴隷が主人公のお話し。恋愛？ ここに恋愛要素を感じられたら、あなたは立派な変態だよ。

元王女。今は奴隷。

奴隷。まあ、わたしは、そんな御身分。

とある極悪商会の不正を暴くために潜り込んでいる、王国の秘密組織の諜報員の一人、とかではなく、掛け値なしの、奴隷女。

見た目は、自分で言うのもなんだけど、結構可愛いと思う。

肩で切り揃えられた髪の毛は、まあ汚れとかで臭いけど、洗えば鴉の濡れ羽のようだと、昔のご主人様に言われた気がするし、肌も、いろいろ傷がついて膿んだりしているから汚いけど、昔は真っ白だった。

そんなわたしは、今は昔、とある王国の王女様だった。

だけでも、なんだか、革命が起っちゃったみたいで、わたし逃亡中。

その途中に、この奴隷商のクソ豚に捕まえられて、鉄の手錠なんかはめられて、首には呪い付きの首輪なんかはめられちゃって、犬みたい。

いつのまにか、眉間には皺が寄っていて。

とあるご主人様に声をかけられて振り向いたとき、「なんだその顔はっ！」と殴られてしまった。余計に不細工になってしまって、また同じ商会に売り捨てられたけど。

手首も首も、膿だらけ。血がこびり付いて、やな臭い。

けど、これはまだマシな方なのだそう。クソ豚が言うには、だ

けど。
昔、肩口が膿んでいた女性がいて、クソ豚がほったらかして各地を転々としていると、運悪く、虫が群生しているところに行っ

まい　ここからは言わなくてもいいと思うけど、うん、虫が沸いたらしい。

うねうねと、幼虫が出たり入ったり。

泣き叫ぶ女がうるさいから、そのまま殺してしまったらしいけど惜しいことをした、なんて言っていた。

そのときは、殺してやろうかと思ったけど。

それは、首と手についている呪いの枷が、許さない。

これを使った所有者の意にそぐわぬことすれば、激痛が奔る仕組み。

昔、強く反発した女性が発端で、これをつけるのが始まったらしいけど、いい迷惑だ。本当に。

まあ、それでも強く反発する女性がいたらしいが　痛みにしたうちまわり、あっけなく泡を吹いて、目を白黒させて、絶命したそう。

それからというものの、クソ豚に逆らうのは暗黙の了解として禁止ということに、この商会の女性の間ではなっているらしい。

そこまでして生きたいのか？　と言われれば、そんなのは愚問だと、答えるしかない。

生きたくない人間なんて、死んでしまえ。さっさと死んで、その溜めに溜めた幸せな思考をする余裕を、わたしに分けてもらいたい。少しでもいいから。

死にたい人間なんてのも、ここにはいない。

ときどき、泣きながら、「死にたい死にたい」と蹲っている女性を見るけど、やっぱりその娘も自分で命を断とうとはしない。死にたいのなら、クソ豚に反抗すればいいだけなのに、それをしないのは、やっぱり死にたくないからだ。

元王女のわたしが言うのはなんだけど、本当に、クソツタレな世

の中だと思う。

こんな世の中にでも、人の不幸せを狙い澄ましたかのように陥れ、嘲笑っている人間がいて、そのせいで泣き叫んでいる人もいる。

わたしも、そうだったから。

奴隷の剣闘士の戦いなんかを見て、はしゃいでた。

それが、今となっては　その側なただけ。

こんな世界にも、なんだか最近、希望と呼ばれるものが出来たらしく、勇者の一団が、王国から魔王をやっつけに出立したらしい。

『勇者』 ウエルナ・イーケット。

『連立世界』 エル・ウエグナー。

『創造輪廻』 ルシル・ヘルファード。

『天　災』 シエーナ・アクザリオン。

フザケタことに、勇者以外は全員美女らしい。それも、絶世の。死ねばいいのに。

それ以上にフザケタことと言えば、勇者たちの目的、魔王の打倒だろうか？

そんなことをして、どうしようというのか。

魔王がいるのは、魔帝国と呼ばれるところで、魔族と呼ばれる種族が暮らしているらしい。その姿はほとんど人間と一緒に、だけど、瞳は絶対にオッドアイなのだそう。

なんだか、その国は他の国とは仲が悪いらしい　なんて軽い言葉で片付けるのはいけないのかもしれないけど、簡単に言えばそんなモノなんだろう。

王国側の意見は、こうだ。

『我々の雌伏の時は、今終わった。魔族に虐げられてきた歴史を、今、今こそ！　塗り替えるのである。聖人君子の如き勇者と、その

仲間たちが、必ずや！　その夢をかなえてくれるであろうことを、私は信じているッ！！」

だそうだ。

死ねばいいのに。

虐げられたから虐げるとか、低次元にもほどがある。低次元というかなんというか、次元に存在して欲しくない。いつそのこと死んでしまえ。

死ねばいいのに。

そんな思想を持つ奴ら、全員、死ねばいいのに。

魔帝国の人たちにも、絶対、なにかしらがある。

なかったとしても、そんなことはどうでもいいんだけど。

だって、王国だって、あるのかないのか分からないような理由で、魔帝国の人たちを、根絶やしにしようとしているんだから。

まあ、わたしには、何の関係も無いお話なのだけけど。

嬉しいことといえば、まあ、今日のスープはクソ豚が奮発したみたいで、美味しかったということぐらいかな？

それに、最近危機感を覚え始めているのは、奴隷仲間の女の子たちが、若干百合に目覚め始めていること。時々、寝ているそばで、可愛い花の声が聞こえる。

わたしも、昨日誘われた。「やらないか？」だって。

やらねえよ、ばか。

そんなある日のこと、わたしはいつもどおり際どい服を着て、薄暗いホールでくねくね蠢いて観客　わたしの将来のご主人様たちを誘惑していた。

なるだけ、優しそうな人に。なるだけ、なるだけ、だけど。

わたしの夢は、もう、絶対に咲かないってことは、分かっているから。高望みはしないように、している。

小説では、こういうとき、勇者がドアをぶち破つて、「なんてことを！」とか嘆くらしいけど、そんなことは望んでもいない。

で、大体は、一人の女の子が昔、自分に何かしらの関係があった女の子に似たりしていて、女の子も優しくされて一目惚れだとか腐ればいいのに。

そんな幻想、殺されてしまえ。
甘いものは、苦いんだよ。

そんなわたしは、今日もせっせとくねくね動いて、未来のご主人様たちを誘惑。
していると、

ばがん！ とドアを蹴破つて、金髪碧眼の優男がどなり声を上げながら入って来た。

それから、護衛の人たちが戦ったけど、金髪碧眼の優男は光とか出してめっちゃ無双してた。ずばア、とか、ブッシャア！とか。

いや、待てよ？ このパターン、嫌な予感がする。

まてまてまてまてまてまて、まっちょーだい！

「ちよ、あなたたちのために戦ってます」的な雰囲気とかどうでもいいから、説教とか口鞭叩かなくていいから！

わたしの未来のご主人様たちを、ぶっ飛ばさないでええええええ
ええええええ！

三十分後。

なんだか強そうな大男を、「だけど俺は負けない」的なことをほざいて、きらきら輝きながら倒した金髪碧眼の優男は、呆然と立ち尽くすわたしの方に歩いてくる。

何を思っているのか、わたしを見て、「き、きみは！」とかなん
とか言いだして、はっとなつてばっとなつて、フツと達観したよう

な顔になったかと思うと、こう言うのだった。

「一緒に、来るかい？」

わたしは、言葉が出なかった。

うれしい？ 感動？

あー、はいはい。いいお話だね、うん、最高だよ。小説だったら、の話だけど。

今ね、きみ、分かってるかな？ うんうん、分からないよね、温室育ちの勇者くんには。わたしもその分からない気持ちは分かるよ？ 温室出身だし。

だからね？ 教えてあげるよ。

「死ねばいいのに！！」

勇者について行ったら、命がいくつあっても足りるかボケェ！！

元奴隷。今は被害者。

結果。結果？ 本当、どうしてくれるんだよユウシャサマ。

わたし、職を失ったじゃないでござーせんか。

いや、ね？ 考えても見てくださいよ。奴隷って言ってもね？

無理矢理連れて来られて無理矢理奴隷にさせられた人と、無理矢理連れて来られたけど最終的に納得している人と、お金が無くて最終的に自分を売った人と、極悪犯罪人が奴隷にされているケースとかあるんですよ？

そしてね？ 奴隷って言うのは、もうこの世界に根強く根付いているんだから、こんなことをしても無意味。というよりも、世界にとっては大きな損失とも言えるんだ。

で、わたしが最終的に言いたいことは、

「あなた、馬鹿ですか？」

この一言なわけ。

おわかり？ 自分がしたこと、わかってる？

世界中の奴隷を解放したとして、その後何が待ってるっていうんだ？ その全員の面倒を見てくれるとでも？

戯言だね。そんなの、温室育ちの勇者くんにはわからないだろうけど、そんなことはムリ。

奴隷商人だって、きちんと秩序ぐらいはある。

無理矢理人をさらうケースなんて極稀。大抵は、人身売買。

だから、その後待つてるのは、また奴隷。

「勇者くん。あなたがしたことは、そんなことなんだよ。」

「馬鹿じゃあないさ。俺だって、結構考えて助けたんだ」

「その考えとやらを聞かせてください」

そう尋ねるわたし。

「元居た場所に返してあげるのさ」

元居た場所なんてない人はどうすんだよバカ勇者。バカ王子。アホの子。

死ねばいいのに。

考えなしの男なんて、すべからく地獄に落ちてしまえ。

なんてことは言えるはずも無く、わたしは、いつにない怒りを押さえながら、ヤサシーク、テーナーに教えてあげることにした。

わたしって、偉い。

「いいですか、勇者さま。元居た場所が無い人は、どうするおつもりですか？ もしくは、いた場所を追われた人や、自分から奴隷になった人」

「む？ 元居た場所が無い人などいるのか？ それに、追われた人にはその場所の人と和解してもらえばいいし、自分から奴隷になった人はまた人生の再スタートと思って、やり直せばいいだけではないか？」

出来ないから、奴隷になったんだろうが。

物凄く頑張れば出来ていたはず、なんてのは幸せ者の発想なんだから。

奴隷になる直前だって、物凄く頑張ったはずなんだから。死に物狂いだっただはずなんだから。

最初に来れなかったことは、最後まで出来ないんだよ。

ファンタジーの小説じゃあるまいし。ちよつと手を抜いていて、あとから本気を出したら楽勝でした、なんてことは絶対ない。

「どうでもいいですけど、わたしは、あなたにはついて行きませんか」

大事なこと。勇者なんかについていたら命がいくつあっても足りない。

伝説の剣なんて抜けるはずなんて、そんなこと、絶対にない。

「なんで。俺についてくれば、君が心配しているようなことにはならないはずだよ」

なるんだよ、あほ。

だから第二王子はアホの子って囁かれるんだよ、あほ。

「しつこい男は嫌われますよ、勇者さま。わたしなんかより、ほら、あなたの後ろでわたしのこと物凄く睨んでる人たちとか、めっさ美人じゃないですか」

「なんですの、あなた。今さっきから、ウェルナ様になれなれしく、しつれいですわ」

そう言ってくるのは、金髪碧眼の美女。物凄い美女。

それ以外は特徴なし。特筆すべき点は、美人。ただそれだけ。

ぶつ、没個性。消えていなくなればいいのに。

「エル、言い過ぎだ。我が主が気に入っているのだから」

そう言うのは紫髪紫瞳の美女。物凄い美女。

なんだか、人間じゃないっぽい。怖い。がくぶる。

「ルシル、これ以上女の子が増えたら、ご主人様の体もたないよー。まさに精を絞りとられるっていうかさー」

そう言うのは、橙髪橙眼の美少女。

元気っ娘。抱きつきたい。もふもふしたい。わふわふ。

「落ち着いてよ、三人とも。俺は、この人と話してるんだから」

「……はい（ああ）（はい）……」

死ねばいいのに。

（、・・・）

逃げ出した。

一日ゆっくり考えてくれ、と言われて、まあ、逃げだした。

あんな女たちと一緒にいるのは嫌だし、あの勇者と一緒にいるの

も嫌だし、っていうか、あのハーレム要員になるとか、考えただけでも吐き気がする。

なんだって、わたしの生活を奪ったアホの子のために腰振らなきゃなんのだ。

わたしの婿さんは、農家の優しいお兄さんって相場が決まってるの。おわかりかな、坊や。

「……逃げてきたのはいいけど、ここ、どこだろう」

無計画過ぎたかな。

こんな、こんな襦袢衣のような恰好じゃどこにも泊めてもらえないだろうし、物乞いをするにも、なんだかなあって感じたし。

それに、早くこの街からでないと追手が絶対に来る。

あの手の男は、わたしの過去に辛いことがあってなんやらこうやらとか、余計な御世話を焼きたがるんだ。

まあなんにしても、お腹が減った。

誰か飯くれ。

「ひーれほーろひー」

あ、馬鹿だ。馬鹿がいる。

なんだか、冒険者っぽい格好をした、酔っ払いの青年がいる。

……あの男の、ヒモになる！

思い立ったが吉日。わたしは出来るだけ楚々とした雰囲気を出して、青年の下に近づく。

「あ、あの」

「んあ、どーしたのですか？ いやあ、僕、仲間に馬鹿みたいに飲まされてしまつて、こんなじょーきょーになつているのであります、上官殿オオ！」

「きゃあ!？」

いきなり抱きついてきやがつた。

なんかわたし、上官殿になつてゐるし。泥酔か。泥酔泥酔。

「うーん、おねえさん、いい匂いがしますね。くんくん」

変態だ、と思つたけど、待てよ？ それはないはずだけど。もう、一週間は体を拭いてないはずだし。クソ豚の血とか最後に浴びたままで、自分でも吐き気を催すほど臭いし。

「そんなことはありませんよ」

「いえいえ。優しい人間の臭いがしますよ。くんくん」

こらつ。どこ嗅いでる。

じゃなくて。そんなお色気はわたしに求めるでない。みたいのなら娼館にでも行つてくれ。

「あの、わたし、住む場所が無くつて」

「うん、そうなのですか？ あはは、それならそうと、早く言ってくればいいものを。僕の家でいいのなら、泊つてもかまいませんよ」

「え、ありがとうございますっ！」

やばい、わたし、猫かぶりがうま過ぎる。

まあ、そのまま監禁とかされるかもしれないけど、それはそれで働かなくていいから楽そうだし。

「あの、お名前を聞いても？」

「ん、ああ、僕の名前ですか？ ええ、僕の名前は」

「探せ、探せエ！ まだこの近くにいるはずだ！ 魔王が、この街に現れた！」

え？

「アルベル・フォン・レグナント。魔帝国の領主ですよ」

ええ？

「まあ、なんですか。騒がしくなってきたようですし、ちょっと場所を変えましょう」

指パッチン。

地面に魔法陣が浮かび上がってって え？

視界が暗転して断線したかと思うと、すぐさま風景は細やかな線に変わって、そのなかでたゆたっていると、わたしの身体は、見知らぬ、お城のような場所に出ていた。

「ようこそ。おねえさん」

そう言って、地面に大の字になって倒れていたわたしを見下ろす、冒険者風の青年。

瞳は、金と銀の、オッドアイ。

ああ、魔族じゃん。

「僕のお城に、ようこそ」

うん。

なんだか、魔王に拉致られた。

元奴隷。今は被害者。（後書き）

手抜き感溢れるッ！

ご感想ご批判等々、お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8329y/>

奴隷王女の「死ねばいいのに」は結構辛い。

2011年11月24日21時52分発行